
20回目の太陽のもと

夏川あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

20回目の太陽のもと

【Nコード】

N1194T

【作者名】

夏川あかり

【あらすじ】

小さな小さな星でのお話

6回目の太陽が昇ったときボクは眼を覚ました

小さな小さなこの星の上

たったひとりで目を覚ました

「おはよう。ボク」

ボクは起き上がり、顔を洗い、ご飯を食べた

「今日は後15分しかない。急がなきゃ。」

ボクは外に出た

小さな小さな太陽はもう沈みかけている

空は真っ赤に染まり始めた

ボクはその日、木を植えた

2本の木を植えた

あたりは真っ暗になった

ボクは手を休めてその場に座った

空には数えきれない光があった

「キミはこれをきれいだといったね」

「でもボクはどうしてもきれいだとは思えないんだ」

「ボクはこれを見ると怖くなる」

「どうしようもないくらい怖くなるんだ」

地平線がだんだん明るくなってきた

「そろそろ夜明けだ」

ボクは7回目太陽が昇った時に

花を2本植えた

そして夜になると星を見上げた

ボクは8回目太陽が昇った時に

火を2つたいた

夜中の星の数が減った

ボクは9回目太陽が昇ったときに

ご飯を食べた

ご飯をもう1つ用意した

夜はずっと2つの花を見つめていた

ボクは10回目太陽が昇った時に

眠りについた

そして15回目の太陽が昇った時に

目を覚ました

木も大きくなり、花にはつぼみが出来ていた

16回目の太陽が昇ったとき

ボクは大きくなった木から

テーブルを1つと

椅子を2つ作った

余った木で花瓶も作った

17回目の太陽が昇ったとき

ボクはキミの夢を見た

どうして今キミがココにいないのか

その理由を知らないことを今知った

18回目の太陽が昇ったとき

花が咲いた

ボクはそれを花瓶に入れて机に置いた

19回目の太陽が昇ったとき

ボクはココで初めて泣いた

星の光も火の温かさを感じられなくなるくらい

ずっと泣き続けた

「キミはどこにいるの?」

「ボクはどこにいるの?」

「この星はあまりにも小さすぎるから」

「キミを見失ってしまったよ」

「どこにいるの?」

「返事をしてよ」

地平線が明るくなってきた

とうとう20回目の太陽が昇る

「ボクはさみしいんだ」

「孤独なんだ」

「いつかみたいに戻れないのか？」

「いつかいたあのころへ」

「キミの待つ」

「ココへ」

20回目の太陽が昇り切ったとき

そのあまりにも小さな小さなこの星は

ボクの声とともに

どこかに消えてしまったんだ

「ねえ」

「キミがいつ来てもいいように」

「全部キミの分も用意してあるよ」

「いつかみたいにまた」

「ああそうか」

「ボクが一番大切なものを1つも用意していなかったんだ」

「だからキミはこなかったんだね」

小さい小さいこの星に

ジッタイなんて

いらなと思ったんだ

小さな小さなこの星の中

キミは眠り続けていたんだね

(後書き)

読んでいただきありがとうございます！

アメブロの方でブログやっています

[http://profile.ameba.jp/bcmind
-ofakrrry/](http://profile.ameba.jp/bcmind-ofakrrry/)

夏川でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1194t/>

20回目の太陽のもと

2011年10月9日01時49分発行